共同利用BLの建設に向けて

◇共同利用ＢＬ併設計画に向けて

名古屋工業大学　ｾﾗﾐｯｸｽ研究施設
虎谷　秀穂

平成７年４月２８日に『共同利用ビームライン計画併設に関する説明会および討論会』と称する会合が、東京駒込の共同チームで開かれました。その後、『光彩』の編集幹事の方から、出席した私に、会合の内容の一端を紹介するようにとの原稿執筆依頼が届きました。会合の内容を会員の皆様方になるべく知っていただくことが、各サブグループ（以下SG）が今後ビームライン計画を検討する上で大変有意義であるとのことです。

さて、話はこの４月２８日の会合が一つだけポツリとあったわけではありません。建設計画は併設案ということで現在大きく動き出しているわけです。併設案が最初に世話人に公表されたのは、３月１６日に同じく共同チームで開催された『共同利用ビームライン計画提案書の検討内容に関する説明会』という会合においてです。そこで具体的にどのサブグループがどの建設グループに属するかという、併設案が提示されました。その日の後半にはグループ同志のお見合いがセットされたわけです。その後、４月４日までにSGとしての併設案に対する賛否・意見を寄せるようにとの連絡がありました。４月２８日の会合はその叩き台と各SGの回答を踏まえた上で、併設グループ内のSGからいわゆる幹事SGなるものを決めるためのものでした。この時の最終案を踏まえて、５月１７日のビームライン検討委員会での決定、最終答申案の提示がなされました。そして６月１日に『共同ビームライン建設に関する打合わせ会』が開催され、ここにきて補正予算がついたことで話は現実味を帯びて急展開をしているというのが現状だと思います。

共同チームから提示された併設案とは、以下のようなものです。

①併設の基本的考え方は、同じ光源、同じ分光器を用い、タイムシェアリングによって複数の実験を可能にするというものである。
②併設グループはこの過程で建設に参加、利用を進め、ポテンシャルの向上を計る。
③たとえ複数のステーション、複数のSGが存在しても、ビームラインには一つの名前をつける。

この様な併設案が提示されてきた背景には以下のようなことが考えられます。
①先行きのメドが与えられずに多くのサブグループがまだかまだかという状態で待ちぼうけを食っているという状態を、利用者懇談会としては早く解消して欲しいということを、共同チームとの懇談の折りにいつも強く要望してきた。
②平成１０年までに１０本の共同利用ビームラインを建設するということ、その後のビームライン建設は財団に移管されるという組織上の問題。

③予算の枠。

会合のおりに出た今後の展開に対する質問に対して、将来（平成１１年以降）の分離そして統合等は十分に考えられる。サイエンス・ユーザー等によって変わり得る。柔軟に対処するとの答えでした。

さて、我々SGが幾つか気になることは、一つは共同チームの仕事が財団に移管される平成１１年以降、その辺りにおいて空白状態が生じないか、その後どの様に展開されていくかということでしょう。併設案が出てきたことによって多くのSGが早い時期にビームライン建設に関わり、実験を開始できるということは大変結構なことに思えます。しかし、同時に危惧されることは、SGの集合化と光学系に規格化によって、最初にあるべきサイエンスが段々とやせ衰えないかという点です。又、世界第一級のステーション建設にはそれなりに予算がかかるのは当然と思われます。今後はステーション建設にもっと予算を投入して頂きたいというのが全てのSG共通の願いであるでしょう。

注）平成１０年が一つの目途とされてきましたが、ここのところにおける補正予算の展開や全体の意見などから判断して、これは平成９年に早まると考えてよさそうです。一応、文章は平成１０年ということで書いています。

◇共同利用ビームラインの建設に向けて

慶応義塾大学　理工学部
辻　　和彦

SPring-8の放射光を用いた研究の実現がいよいよ迫ってきた。ユーザーが待ち望んできた共同利用ビームラインの建設に向けての動きが急に激しくなってきた。1995年３月１６日には共同利用ビームライン計画併設案に対する説明会が行われた。ここでは、ユーザー側から要望していた、できるだけ多くのユーザーが１日も早くビームを使った実験ができるようにしてほしいとの要求に答える形で、計画の提案を行っている23SGを、平成１０年までに建設される１０本のビームラインに併設することで実験を可能としようとする大胆な提案が行われた。本年度は最初の４本のビームラインに続く数本しか認められないと考え、まわりのSGはすべて競争相手であると考えていた我々にとっては、驚きだった。喜びと同時に、正直いってこれは大変なことになったと思った。

我々高温SGは、併設案にある他の３グループと、技術的な検討を行った。ステーションの共用はかなり困難であるが、直列配置での併設ならば可能で、併設案を受け入れる方向で、さらにSGメンバーの意見を聞いた。SGとしての意見を４月初めに提出するために、FAXや学会会場での討論を行い、意見書をまとめるとともに、計画の具体化の作業を開始した。

1995年４月２８日午前には駒込で「共同利用ビームライン計画併設案に関する説明会」があり、共同チームにおけるビームライン建設計画の方針が説明された。この中で、SGの枠を越えて、BLの建設をするようにとの要請があった。また、１０本の共同利用ビームラインの建設後も、１１本目以降のビームライン建設は継続して行われる。SPring-8のビームを使った実験を行ってから、さらに新しい研究計画が生まれてくるものと期待しているとの説明があった。また、共同利用ビームラインの他にも、原研、理研のビームラインも立ち上げたいし、一部を共同利用の利用ができないか検討中であるとの説明もあった。今後のスケジュールとしては、エンドステーションまで今年度中に作業着手してほしい、共同チーム側としては内部スタッフの担当者を決めるので、緊密な連絡相談をしてほしいとの要請があった。

午後には、「共同利用ビームライン計画併設案に関する討論会」があり、各ビームライン併設案についてビームライン検討委員会及び共同チームの関係者と計画提案者との間で討論があった。連休直前の開催であったが、連休明けからの作業の多忙さが予測された。幹事グループはビームラインの建設に責任を持ち、併設グループ間の世話役となって、共同チーム側との窓口役をするとの説明であったが、役割については必ずしもはっきりとはしなかった。

1995年６月１日には駒込で、「共同利用ビームライン建設に関する打ち合わせ会」が開かれた。ここで、平成７年度第１次補正予算において共同利用ビームライン１０本分の建設予算がすべて認められた。本年度中に契約まで行う必要がある（入札も含めて）。そのためには、9月にはすべての計画が決まっている必要がある。などの説明があった。BM2のビームラインは高温構造物性と呼ばれることになり、高圧地球科学、トポグラフ、高温の３グループが直列配置で利用する。ビームラインの幹事グループには高温SGがあたるが、幹事グループはビームラインにおいて優先権を持つわけではないことなどが説明された。各ビームライン毎の共同チーム側担当者の紹介があり、具体的な打ち合わせを行った。

ゴー・サインがでたとなれば、次の関心は予算額であるが、各グループの建設計画をまとめて、一つの計画として６月下旬までに提出してほしいとの要請があった。高温構造物性のビームラインは、特殊実験装置のグループの集まりであって、装置の共通化はほとんど不可能ではあるが、できるだけの努力はしてみることにして、６月２０日までに各グループの要求を出してもらい、幹事グループの世話人がとりまとめることにした。集まった要求は、驚くほど高額となったが、とにかく原案を作り、各SGの了解を得て、共同チーム側の担当者に提出し、理解していただくことを期待することとした。

計画の先行化が進むことは、ユーザーとしては喜ばしいことではあるが、これまでの建設のスピードの記録を大きく書き換えるほどの超特急化には、SG内の意見統一、SG間の協力を含む情報交換、共同チーム側との意見交換がついていけるだろうかとの心配もある。個々のユーザーの努力が必要であるのは当然であるが、これらの問題を解決するために、共同チーム側担当者や、SPring-8利用者懇談会の配慮を期待したい。